

月刊

# みんなぱく

◎ 国立民族学博物館

2009

7  
月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283  
平成21年7月1日発行 第33巻第7号通巻第382号

◎ みんなぱくインタビュー **上橋菜穂子**



# マナスルへの恩返し

のぐち けん  
野口 健

- 1 エッセイ 世界へ●世界から  
マナスルへの恩返し  
野口 健
- 2 みんぱくインタビュー  
上橋 菜穂子  
現代の語り部
- 8 モノ・グラフ  
八重山象形文字・  
カライダーの新しい発見  
マーク・ローザ
- 10 地球ミュージアム紀行  
兵庫県立美術館  
港に臨む「芸術の館」  
高橋 晴子
- 11 表紙モノ語り  
オーストラリア・アボリジニのアクリル画  
「ミツアリのドリーミング」  
久保 正敏
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 人生は決まり文句で  
信じる者は、救われない  
関 雄二
- 15 時論 新論 理想論  
心地よい生をもとめて  
21世紀のライフデザインへ  
鈴木 七美
- 16 多文化をささえる人びと  
中国人コミュニティと日本社会をつなぐ  
「関西華文時報」  
中野 克彦
- 18 生きもの博物誌  
空気を食べるきれいな食べ物  
〈セミ〉  
市川 哲
- 20 歳時世相編  
七夕  
織姫の嘆き  
吉本 忍
- 22 フィールドで考える  
魚を売ること、生きること  
沖縄県糸満のアンマーたちに学ぶ  
三田 牧
- 24 みんぱくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう  
次号予告・編集後記

## ヒ

マラヤの山岳民族——。それを聞くと、「秘境に住む人々」というようなイメージを抱く人も多いだろう。しかし実際には、インターネットができるほど発展している村もある。

エベレスト山麓のクンブー地方がその顕著な例だ。私は、エベレスト清掃登山などでこの地域に通い続け、その発展をリアルタイムで見ってきた。

この発展の影には、エベレストに初登頂したエドモンド・ヒラリーの力がある。彼は「ヒマラヤ基金」を作り、麓の村々で教育、福祉、環境保全活動を行った。また橋、学校、病院などの設備を整える一方で、自然環境の大切さも啓蒙してきた。そしてヒラリー卿のつくった学校で高い知識を得た生徒は、パイロット、医者、看護師、教師などになり、地域の発展を担ってきた。

三年前の二〇〇六年は、ヒマラヤと日

本の関係において節目の年だった。五〇年前の一九五六年、未踏の八〇〇〇メートル峰として残されていたマナスル（八一二五メートル）に日本人が登頂したからだ。そのニュースは、新しい国を作り始めた日本人の勢いをさらに加速させてくれたという。

その五〇周年の年に、私はマナスルに挑戦した。しかしその麓で半世紀の「空白」を感じるようになってしまった。

山麓のサマ村では、大雪も強いられる厳しい自然環境のなか、人々は決して快適とは言えない生活を送っていた。村にある学校には、電気がきておらず、子どもたちは、暗い教室で授業を受けていた。勉強をしている子に「将来の夢は？」と聞いても返事がなかった。彼らには、将来何になりたいという選択肢がないのだ。ここにはヒラリーのように献身的な援助をおこなった日本人は誰もいなかったのだ。

賛否両論あれ、私は「即決即行」タイプの人間だ。彼らに手を差し伸べないわけには行かなかった。

まず私は、ここでも「ごみ拾い」から活動をはじめた。サマ村が今後どんな歴史を歩むにせよ「環境意識」は必ず重要になると思ったからだ。村の周辺に散乱するごみを五トンほど回収したが、その時は「ごみ」の意味すらわからない村人も多かった。

三年後の今年、再びサマ村を訪れて驚いた。村が前回よりも綺麗になっていての。その後、村では定期的にごみ集めを行ってこれているという。

今回は、学校の建築について人々と協議を深めた。これから現地の文化を尊重しながら、何年もかけ、さまざまなものを実験させていきたいと思う。五〇年前マナスルが日本人に与えてくれた以上の「夢」を、最適な形でサマ村に恩返ししたい。

アルピニスト。1973年生まれ。1999年、エベレストの登頂に成功し、7大陸最高峰世界最年少登頂記録を25歳で樹立。2000年からはエベレストや富士山での清掃活動を開始。また「野口健・環境学校」を開校するなど環境問題への取り組みを行う。06年、09年にはマナスルを清掃登山。現在、マナスル山麓のサマ村に、学校建築のプロジェクトを進めている。

# 上橋 菜穂子 現代の語り部

文化人類学・民族学の考え方は、研究の世界だけにとどまることはない。その知見と経験を基礎としながら、さまざまな領域で活躍する研究者の存在は、あらためてこの学問分野の広がり

——これまで発表された作品を分類するといくつかのジャンルにわかれるように感じるのですが。  
私の作品は、ファンタジーや児童文学と表現されることが多いのですが、私自身は、ジャンルはまったく考えていません。ただ、生まれてくる「物語」を書いていただけなんです。

——そうすると、最初に何かインスピレーションの中に生まれた瞬間に生まれてきます。例えば「守り人シリーズ」の場合は、レンタルビデオの予告編を観ていて、燃えるバスのなかから、エキストラのおばさんが男の子の手を引いて慌てて降りてくるシーンがありまして、それを見た瞬間に、バルサという女性の姿が浮かんできて、この人が、小さな男の子を守って旅をするのだと思ったのです。これが『精霊の守り人』の主人公バルサ誕生です。しかし、それだけでは物語にならなくて、それに何かがかくついていた時にいきなり、ああ書けるって思うのです。

——自分が見ている世界を文章で写生しているような感覚で書いています。風の音や声も自然と聞こえます。作家が見たり聞いたりしていないものは、読者にも見えないと思うのです。

## 語り部の誕生

——そういう才能に、自分が気づかれたのはいつごろですか。

物心ついた時には、物語を書く人になると思っていました。作家という言葉すら知らないほんとは小さな時から、物語中毒のような状態だったのです。  
あまり身体が強くなって、風邪を引いたりすると親がよく本読んでくれていたことがひとつ、もうひとつは、父方の祖母の影響でした。明治の生まれの、武家の血筋の人で、いつもきちんと正座をされていてね、たくさん昔話をしてくれました。まさに口頭伝承の宝庫だったのです。夢中になって祖母の話を聞きました。だから、文字が読めるようになるよりずっと前に、物語に慣れ親しんでいたのです。

その後、作家という存在を知りましたが、漫画

聞き手 久保正敏 (本誌編集長)

オーストラリア先住民コミュニティ成立史の研究などのほかに、民族学に情報学を取り込む民族情報学や時空統合アーカイブスの重要性を提唱している。

——たいなもの、あるということでしょうか。  
そうですね。いきなり生まれるのです。どうしてそうなるのかはわかりませんが、いきなりきます。「獣の奏者」も「守り人シリーズ」もそうです。物語を書き進めるうちに、あ、こういう方向に行っちゃいけないな、と感じるときがあったりして、頭のなかで枝道がいっぱい分かれていくので

家も結局、物語をつくる人なので、興味をもつようになりました。父は洋画家なもので、漫画は大嫌いで、漫画禁止令がでるほどでした。でも、禁じられると恋は燃え上がるもので(笑)、中学校の高校のころは漫画にはまって、漫画家になりたいと思うようになりました。  
でも、一方で、歴史がものすごく好きだったんです。考古学か、世界史、日本史のいずれかを学びたいとずっと思っていました。どうせ学ぶなら博士課程まで行こう、第一線で活躍する研究者たちと同じくらいの知識をもった上で、何か書きたいと思ったのです。

## 文化人類学との出会い

——文化人類学を専門とされるようになったきっかけは。

大学のゼミで、山口昌男先生の『アフリカの神話的世界』に出会ったんです。そのとき、衝撃を受けました。私は、ギリシア神話や北欧神話は知っていても、アフリカに神話があることさえ意識していなかった。遠いローマ皇帝の名前を知っているのに、お隣の朝鮮半島の王朝の王様の名前は知らない。オセアニアの島々の歴史も私は知らない。なんと私の知識は偏っているのだからと思ったんです。

文化人類学は、その「偏った世界」の外へと目を向けさせてくれた学問で、そこに心惹かれたのです。  
——最初はこのような調査・研



ミンゲニューの小学校にてアポリジニの子どもらと。ポラントニア教員をしていたころ (1990年)

## 究をされたのですか。

卒論と修論は、日本における産育習俗と月経不浄観がテーマで、青ヶ島と宮古島で調査をしました。当時は、男女の社会・文化的な地位の問題や、リミニリティとの関わりなどで月経不浄観について考える議論が主流でしたが、実際にある習俗が維持される背景には、他にも大切な要素がいくつもあるのではないかと考えていました。

——そんななか、博士課程に進む時に、オセアニア研究がご専門の青柳真智子先生から、オジイ・オバアに可愛いがられてないで、言葉が通じないところで、もう少し大きなテーマにとりくんではどうか、と御助言をいただきました。私は当時、アポリジニについて、文献でしか読んだことがありませんでした。文献を読んだ印象では、アポリジニ社会は、いわゆるアングロ・ケルト系の社会のあり方とは大きな差異があるような気がして、こんなに違う文化背景をもつ人びとが、ひとつの国家の中で暮らすと、どんなことが起きるのか、その実態を知りたいと考えたように

なり、オーストラリアをフィールドに決めたのです。  
アポリジニが暮らしているフィールドに入る方法がわからなくて、苦肉の策で、インターナショナル・インターシップというのに応募したら、西オーストラリア州の小麦ベルトにある田舎町の小学校のポラントニア教員として採用されました。それがアポリジニ研究の第一歩でした。

行ってみると文献で知っていたアポリジニと雰囲気がよく違う



上橋菜穂子  
作家、川村学園女子大学教授

——うちはしなほこ  
東京都生まれ。文学博士。専攻は文化人類学、オーストラリア・アポリジニ研究など。『精霊の木』で作家としてデビュー。「守り人シリーズ」は全二〇巻、完結まで二年におよび数々の賞を受賞した。『狐笛のかなた』で野間児童文芸賞を受賞。『精霊の守り人』と『獣の奏者』(闘蛇編)王獣編はNHK教育テレビでテレビアニメ化がなされている。

し、都市のアボリジニとも少し雰囲気が違う。それがすごく不思議で、この人達のことをもっと知りたいと考えようになりました。

最初は数カ月くらい滞在しました。その後も、同じところに半年、数カ月と入っていくようになって、一九九〇年から現在まで、ほぼ毎年、同じ地域に入っています。

## 翻訳と文化差

——研究と執筆を両立されるのは大変ではないでしょうか。

もう、死にそうなほど大変です（笑）。今年は『獣の奏者』がアニメ『獣の奏者エリン』として、いまNHK教育テレビで土曜の夕方六時二十五分から放送されていて、その監修もやっています。去年は『獣の奏者』の新刊（探求編）（完結編）の執筆のためにフィールドに行けませんでした。『精霊の守り人』がアニメになったり、新潮文庫になつたりしてから、作家業の方が異常な忙しさになってしまいました。「守り人シリーズ」は、アメリカでも出版され、二〇〇八年度にアメリカで出版された翻訳の児童文学の最高賞ミルドレッド・L・バチエルダール賞をいただきました。この賞は、数十年の歴史がある賞なんですが、これまで、ほとんどフランスとかドイツの方がとられている賞なので、受賞の知らせを聞いたときは驚きました。イタリアや、ブラジル、台湾でも出版が始まっています。『獣の奏者』はフランス、ドイツ、ス



久保正敏編集長（左）と上橋菜穂子さん

ただ、児童文学の出版社から出されている場合は、「大人の恋愛」を描く場合は、大人にはわかっても、子どもにはわからない表現をする、というような気遣いはしています（笑）。大人の方々も楽しんでくださっているのです、これはまあ、うまくいっているということでしょうか。

読者層は、すごく多様で、小学生から八十代のおばあさんまでいらっしゃいますし、もともと二十〜四十代の女性読者が多かったのですが、いまは、中高年男性からも、よくお便りを頂戴します。

## 多様な世界を描きたい

私は、多様な文化が混在し、多様な立場で生きる人間が交差する世界を描きたいのです。

例えば、『精霊の守り人』の主人公バルサは、流れ者です。どこにでも行けるけれど、どこにも根付くことが出来ない。それに対して、村落社会に根付いて生きる人びともいる。チャグムという登場人物は為政者になる立場の少年だから、国というレベルでものを考えなくてははいけない。他の国へ行つて、様々なものを見るけれど、常に心の中で、では自分の国はどうしたらいいのだろうと考へてしまう。それに対し、バルサにとってはどの民族も国々も並列で存在しているんです。そして、バルサより、さらに枠にとらわれてないのが、呪術師たちです。彼らは、この世さえも相対化してしまう越境者たちなんです。こういう多様な立場の人びとが動きまわる事によって、物語

ウェーデン、韓国、タイで翻訳が始まっています。英語版では翻訳者とカンヅメになって修正作業もしまして、翻訳というのは「文化の翻訳」なのだなど実感しました。たとえば、「バルサが気合いを発した」というようなところが英語ではうまく表現できないのです。そのほかにも、日本語は主語を書かなくても通じるけれど、英語では主語をきちんと決めなくてはならない。そうすると、雰囲気はかなり変わってしまうんですよね。翻訳っておもしろいなと思いました。しかし大変でした。神経を使う作業ですし、相当時間がかかりましたから、正直、疲れ果てました。フランス語やタイ語でどうなっているかは……考えないことにしています（笑）。

## 幅ひろい層へ向けての物語

——上橋さんの作品が多くの子どもたちに受け入れられるのは何故でしょう。

最初に児童文学として作品を出したのは、なんというか、私の思い込みからだったんです。中高生の時に、J・R・R・トールキンの『指輪物語』や、ローズマリー・サトクリフの

「ローマン・ブリテン」シリーズなどにゾッコンはまったんです。サトクリフの歴史物語は、児童文学として出版されましたが、実に容赦のない物語で、骨太でリアルでした。例えば『ともしびをかか』は、ローマの属州支配が終わりを告げる、まさにその瞬間のイギリスを描いているのですが、ローマという「想定上の故郷」とイギリスという現実の故郷の間では進んでいくのです。——西洋の作品との違いはどのあたりですか。

キリスト教が背景にある西洋のファンタジーは、光と影、絶対善と絶対悪の物語だとよく言われますが、私が書くのは、善悪が相対的で、流動していく物語です。

例えば、アボリジニに対するテイクアウェイポリシー（子どもと親の強制隔離政策）を行なった人たちの中には、本当に、それがアボリジニのためになるのだと思っていた人もいます。その「善意」が、別な面から見た時にいかにおそろしいか、相対的な視点がないとわからないと思うのです。私が書きたいのは、そういう事なのです。

——物語が人間の世界で終始しないで異次元の世界までおおよんでいるようですが、どうしてですか

引き裂かれる若きローマ兵が、どんどん流入してくるサクソンとの対立の中で葛藤していく。このサトクリフの一連の物語に、私はすごく惹かれました。これは児童文学なのだと思います。

私には、人間のどうしようもなさや、残酷や悲惨、恋など、「人間について」描くのが文学である、というイメージがありました。でも、私にとって「人」は個として存在しているというより、つねに「世界の中に在る」存在として感じられていた。「人間」というより「人びとと世界」に興味があったんです。滔々と流れつづける歴史と、その歴史の果てにある世界がまずあり、その中で否応なく生きていかざるを得ない存在として人びとがいて、その人びとがぶつかり合い、悩み、動きながら、巨大なタペストリーを織っていくようなイメージが私の中にはあった。もっと言えば、森羅万象すべてが生々流転していく世界が心の中にあつたのです。そういうもの「全体」を描こうとして、物語を書いてきた。それが文学の分類の中では、異世界ファンタジーと分類されるものだったということなのです。

その上、サトクリフの作品が児童文学であるのなら、私の書いたものもそうなのだろう、まあ絶対に純文学じゃないし、と思って児童文学の出版社に持ち込んだのがデビューのきっかけだったので、私が書いた物語は「児童文学」であると思われたりするわけです。

まったく「子ども向け」に書いているつもりはないのですが、もともと必要以上に難しい言葉を使ったり、文を飾るのが好きではなかったからなのか、主人公たちが、さまざまに事に出会いながら歴史の中で生きていく、昔からある「語り物」

私は、「すべてが判明している」ものとして世界を書きたくないのです。人の知覚・理解には、どうしても限界がある。けれど、「限界がある」ことを認識しているということこそが、無限というものを想像することのできる力につながると思うのです。

私が描く異界は死後の世界ではありません。死後の世界と書いてしまえば、ひとつの意味に固定されてしまいますが、異界ならば「わからない」まま在る。人びとは必死に、「そこ」について知ろうとしたり解釈したりしますが、常にそこは「わからない」まま残される。様々な人びとによる、様々な言説が飛び交う、そういう状況を書きたいのです。

調査をしてきたお陰で、日常生活の中で、実際に異界と関わる人たちが、どんな苦労をするか感じることが出来たということは、物語を書く上で、ありがたかったです。異界と関わる人たちには、癒し、癒されるという側面だけでなく、苦痛や恐怖を味わう側面もある。私が調査で出会ったカンカリヤーや、ミコさんたちの中には、いわゆる巫病と呼ばれるようなものにかかって苦しんで、日常生活が制限されてしまうから嫌だと思ひながらも、仕方なくカミサマを受け入れた、という方もおられた。現実の中の、あちら側とこちら側の付き合ひみたいなものを、実際におおあちゃんたちの顔を見ながら話を聞くことができたことが、大切な財産になっています。

## 世界を俯瞰したい

——作品を読んでいるとマレーシアやフィリピンの海の漂泊民ともいわれるパジャウやサマといった、舟上生活者のイメージが浮かぶのですが。



『精霊の守り人』上橋菜穂子=作 二木真希子=絵 偕成社



『獣の奏者』上橋菜穂子=作 浅野隆広=絵 講談社



はい、その部分は意識して書きました。越境と  
いうことを描きたかったので。国境を相対化した  
かったのです。ただ、それを現実のある場所の政  
治劇として書いてしまうと、その地域に詳しい人  
などが、現実と作品を比べて解説してしまい、読  
者は、そこに意識を集中してしまったりします。  
私は、それが嫌なのです。むしろ、世界全体を  
相対化して欲しいんです。でもそれは、現実世  
界を舞台にして書いてしまうと、難しいと思うん  
です。自分が生まれ育った文化の相対化が、異文  
化の体験なしには難しいように。

私は、世界を丸ごと俯瞰して欲しいんです。そ  
ういう視野が生じたとき、はじめて、たとえば、  
ああ、国というのは、人びとの想像によって成り  
立っている共同体なのかもしれない、とか、なぜ  
権威が生まれ、その権威に人びとはこれほど強く  
囚われてしまうのか、というようなことが見え  
くるのではないかと思うのです。

だから、私は、皇族などが為政者たちを、「悪い  
人間」に描きたくないのです。「あの人が悪い奴  
だったから、こういう問題が起きたのだ」と思わ  
れてしまったら、その人のキャラクターの問題と  
して理解されてしまうでしょう？ でも、実際には、  
どれほど「良い」「賢い」人が為政者になっ  
たとしても、様々な問題は起こってくるわけでは  
ないかと思うのです。

——そうすると、今は人類学の方から物語をつ  
くりあげる、紡ぎ出すということですが、反対に物  
語世界が、たとえば人類学に影響をおよぼすこと  
はないでしょうか。

えーと、人類学の方から物語をつくる、とい  
うと語弊があるかも。例えば私は絶対、アポリジ  
ニを物語にしたりはしません。気が小さいのかも  
しれないですけど、いまだに私は「書く」ことにつ  
いてこだわっています。民族誌にしろ何にしろ、  
主観によって切り取ったものを一旦表現してしま  
うと、ひとり歩きすることが、大変おそろしい。

しかも、私の場合は人類学者である、大学教授で  
あるという肩書きが肩ののったりしてしまふ。読者  
の多くは、アポリジニが暮らしている所に行つて  
みることも出来ないわけだから、検証することが  
できない。そういう世界を物語として書いてし  
まった時に一種の権威になって固定化するかもし  
れない。それがすごく怖いんです。それに、私は  
アポリジニではありませぬから、彼らに成り代  
わって彼らのことを物語るといふのは、してはい  
けないことだと感じています。



ただ、「物語る」  
「表現する」という  
ことへの感受性やこ  
だわりは、もしかし  
たら、自分の研究に  
影響を及ぼす、とい  
うことはあるかもし  
れませぬ。

よね。そういうことを見えなくしないように、と  
いうことだけは、いつも心がけて書いています。

## 「魔法使い」ではなく 「呪術師」である訳

ヨーロッパのファンタジーによく「魔法」がで  
てきますが、私には、辻褄が合わないというか、  
理がないと思えてしまう魔法の描き方があります。  
たとえば、人が死からささ蘇るのであれば、世の  
哀しみの多くが、意味をなくしてしまうでしょ  
う？ 物語の性質にもよりますが、私が書いてい  
るような物語の場合、都合が良すぎる魔法を描い  
てしまうと、大切なものを無にしてしまう気がす  
るのです。

それに対して、「ゲド戦記」でルグウィンが  
描いた「魔法」は、いかにも彼女らしいな、とい  
う気がします。彼女の父は文化人類学者のアルフ  
レッド・クロローバーで、母は『イシ二つの世界  
に生きたインディアン』を書いた作家シオ  
ドーラ・クロローバーなんですよ。

『ゲド戦記』では「魔法」は、世界の法則のひと  
つとしてあらわれます。そういうものを読みなが  
ら、さて自分が書けるのは何だろうと思った時に  
魔法使いではなく呪術師なら書きたいな、と思え  
たのです。何か、一般に知られている物理的法則  
以外の、この世に隠れている別の法則を探そうと  
している人びとであれば、私にはとてもリアルに  
思えた。そういう視点をもつ人って、社会から少  
し外れざるを得ない場合が多い。異人の立場で  
あったり、境目に立つ境界の人であったり、マ  
ジナルな存在。そういう人の目というのが欲しい  
と思ったのです。

## 人類学のすすめ

——そういう意味では一般の人たちにも、もっと人  
類学のような相対化の視点を持つて欲しいと。

何かひとつ文化人類学にご恩返しを出来るとし  
たら、一般の人たちに文化人類学の面白さを伝え  
ることかな、と思っています。大学一年生に「文  
化人類学って聞いたことある？」と聞いても、知  
らない学生が多いんですよ。高校までのあいだに、  
一度も触れることがないからなんでしょうね。歴  
史学はよく知ってる。地理学も知っている。だけ  
ど文化人類学については知られていない。

文化人類学の見方や、成果、考え方に對して、  
魅力的な学問かも知れないと、考えるきっかけに  
なって欲しいという気持ちは、すごくあります。  
——作品のベースに人類学の知識があるというこ  
とが読んだ人にはわかるのでしょうか。

インターネットなどに出ている、私の作品につ  
いてのほとんどの評に出てくるのは、文化人類学  
者なので世界観がしっかりしている、ということ  
だったりします。さつきお話ししたように、物語  
はいきなり頭の中に立ち上がってくるものなので、  
私自身は「綿密な世界観」を設定としてつくって  
いるつもりはないのですが、読者は、この人の  
ファンタジーが、他のものとどこが違うのかを考  
えた時に、文化人類学の背景があるからだ、と読  
んでくださっているようなんですね。

それから、私たちはフィールドワーカーだから、  
例えば、カンガルーの内臓の匂いなんか、実体  
験としてわかったりしますよね。全くそういう経  
験をしたことがない人が物語を書いた場合、焼き  
火の匂いや、日が暮れてきた時に火の色が変わっ  
ていく様などの表現に違いがでてくるかもしれな

そういう人は、この世の権威である王などに対  
して、他の人びともつような常識的な感覚では  
服従しないで済むこともあるでしょう。そういう  
存在なら、書きたいな、と思えるのです。

## 人類学が羅針盤

——言語的に論理を作っているのでは無く、論  
理がイメージ化するんですね。

意識してやっていることじゃないんですが、人  
類学を学んだことで、もつことができた様々なも  
のが、物語を書いている時に、「待てこれは違う」  
とか、「こうなった場合は、こうなるだろう」と  
か、ある方向に動かしていく力になっているよう



2008年ベルリン国際文学祭では、ベルリンの子どもたちが『精霊の守り人』を劇にして上演してくれた(2008年9月)

いな、と思うことはあります。  
物語を書いているとき、私は、匂いや手触り、  
光の当たり具合まで、気にしながら書いています。  
そういうことを表現できてはじめて、読者は異世  
界に入れるのだと思うんです。異世界を描いて  
いても、読者とその世界で暮らしているように感じ  
て欲しいんです。

——みんなばくでなにかヒントを得たことはありま  
すか。

共同研究をしている時に、多くの研究者たちの  
話を聞き、議論を聞くことができたのですが、そ  
ういうことが、本当に大きな財産になっていると思  
います。物語は「いきなりあらわれる」わけですが、  
物語が芽吹く土壌を、こういう場で得られた知識  
や思考がつくってくれているのだと思うんです。

それからやはり展示場が素晴らしいですよ。  
細部まで見られるのがありがたいんです。たとえ  
ば、舟の細部などを知る事が出来るのは貴重です。  
物語を書いていて一番こまるところは実はそ  
うい  
う細部なんです。舟を書く場合には、それがどう  
いう形をしていて、どこがどうなっているかが見  
えないと、書けない。そういう時に、すごく大き  
なヒントになりますね。仮面などの造形もそう  
ですよ。こんな造形を人間はなぜ考え出していく  
のか、ということや、多様性などがとてもおもしろ  
いです。

——本日は物語世界の奥深さに眼を開かせていた  
だきました。まことにありがとうございます。

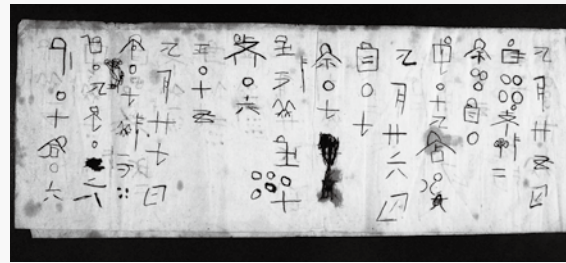
# 八重山象形文字・カイダー字の新しい発見

わたしは民博の収蔵庫にあった一連のカイダー字を見る機会を得た。それは標本番号がK2808、「家記号」「琉球与那国」と記された紙資料三点である。折り紙の残欠二枚とコヨリ仮綴じのもの一綴である。

カイダー字とは、八重山の島民が大昔からあったバラザン（藁算）やスーチューマ（蘇州碼）を改善して機能を拡大させ、色々な内容を表すことが出来る表記法で、記票文字といわれるものである。

## 残存資料はわずか数十点

一六〇九年の薩摩藩の琉球侵攻以降、従来重くなかった人頭税が大幅に増加し、琉球王朝を通して八重山の一五歳から五〇歳までの人がその対象となり、まるで奴隷のような生活をおくることとなった。これがきっかけで、島民が人頭税として徴収されたものを表すのにカイダー字を用いた。その目的は食料や動物と数を示すことにあった。



四月廿五日  
東迎（一石）大高 牛蒡二  
「d」俵俵 小嶺 俵  
吉元 俵十九 入崎 八  
四月廿六日  
小嶺 俵七  
玉城 俵七（取消）  
「d」俵石十  
佐久本 俵六  
大浜（？）俵十五  
四月廿七日  
「d」俵七 鶏 一百  
「d」俵四 「d」俵六  
「d」俵十 前花 俵六

## 複数家族の寄付の記録

あるでもなく、「□五」でもない、五つの四角がくっ付いているような簡略化した形になっている。

次の二つは、複数家族（屋号）の寄付に関する記録である。全員が与那国島の北にある祖納集落に暮らしているようである。

一つは複数のダーハンが現れ、いくつかの家族の寄付の記録である（図2）。二行目は失われているページの続きだろう。

最初の行に表れる「九つの点」は、今まで見たことのない「字」で今のところ意味不明であり、四行目のダーハン「大浜」に見えるが、不確かである。この大浜家は石垣在住

一八七九年、明治政府による琉球処分のもと人頭税は一九〇三年まで続いた。それがようやく廃止になってからは、カイダー字を使う機会が急速に減り、表記法も廃れ始めた。

一九一〇年代にはまだ使われていたようだが、一九三〇年代になると研究者の説明が「過去形」に変わり、今は八十代以上の老人にかすかな知識が残されているだけである。

カイダー字の種類は、（一）家紋のように屋号を示すダーハン（家判）、（二）スーチューマに基づいた数量を示す文字、そして（三）島民が独自に作った象形文字である。

カイダー字で書いてある資料の残存例が非常に少なく、戦前に発見されたもののコピーを含めても数十件にすぎない。板札も紙切れも数枚ずつしかなく、葉へ記載された資料は一切現存していない。

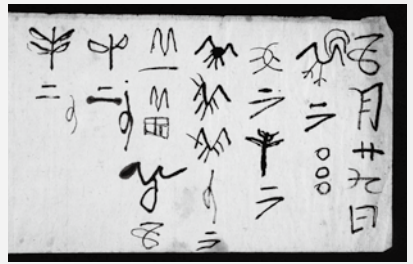
したがって、民博における発見は、カイダー字を研究するうえで貴重なテキスト資料となる。まったく新しい発見であるこれら資料について、以下に紹介してみたい。

文字を解読すると……

第一の資料（図1）には、ダーハンは一切現れないので、一家がある年の五月二十九日に保有していたもの、または寄付したものの記録かと思われる。今までの資料を参考にし、解読してみよう。

五行目の「酒」の字は、通常の形とされている「酒」ではなく、ジグザグ線のみという省

図1 ある一家の「五月廿九日」の記録（横、折り紙1枚、縦13.2、横37.5センチ）



五月廿九日  
鶏三俵俵俵  
魚三菜葉三  
雄馬山羊山羊斤三  
酒一升酒五合 冬瓜五  
大根一斤  
菜葉二斤

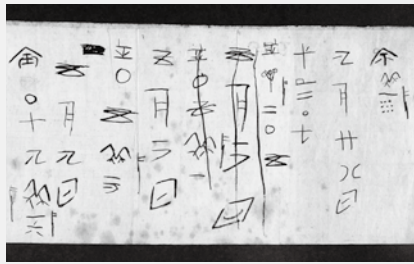


図2 複数の家族に関する記録（横、折り紙1枚、縦13.5、横35.5センチ）

玉城 鶏 一 ……  
四月廿八日  
入与那国 油 一俵 七  
大浜（？）牛蒡 二俵 五  
五月三日  
大浜（？）俵 五 鶏 一 百  
（取消）  
五月 四日  
入高島 米 十九 鶏 一 六  
五月 五日  
大浜（？）俵 五 鶏 一 十  
五月 三日  
大浜（？）俵 五 鶏 一 百  
五月 四日  
入高島 米 十九 鶏 一 六

ではなく、与那国島祖納の一家である。

いくつかの字の右側に傍点のように「量り」の字が付いている。この字の存在は過去の資料にみることができ、かなり崩した形の「量り」の字が「斤」を表すこともあるので、「斤」を示す可能性が高い。ただ「鶏」と「二百」の傍に見られるような場合は「量った」ではないかと考えられる。

この一枚は次の「コヨリ仮綴じのもの一綴」とさらに繋がっている可能性が高い。同一人物の手書きのようである。

## コヨリ仮綴じの資料

図3〜5に示す一綴の資料（コヨリ仮綴じ、表紙とも五丁、縦13・5、横35・5センチ、本紙二丁は折り紙）は、これまで発見されたカイダー字を含む資料のなかでは一番長い例である。合計一七二字のうち、日付、ダーハン、スーチューマ、動物なども含まれている。

なお、いくつかのダーハンに丸のような記号が付いている。「○」は元々「一俵」という意味で、何を示すがはつきり書いていなければ、

通常「米」俵を示す。この場合は、各家族が必ず米を納めていないので、書き手がチェックとして付けたかもしれない。

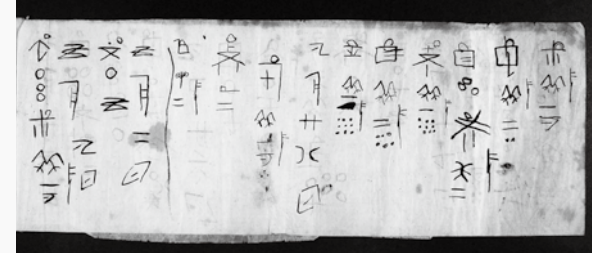
ダーハンについては与那国教育委員会の資料を参考にしたが、未解読のものは「d」のような記号を付けた。

日付は第一の資料にある例よりほぼ一か月前だが、同一人物の手書きかどうかは不明である。

図4の右から二行目から八行目には二、三、六、九個の点を並べた未解読の字が見られる。鶏の数の直後に見られることが多く、米の何俵を表す可能性はあるが、それならば点でなく丸のはずであり、九つのグループ（二石一俵）は現れるはずがない（図3の二及び八行の「四俵」の字を参照）。丸に近い楕円の「卵」の字もあり、鶏は普通に卵を産むのを考慮すると、卵を示すこともあり得る。

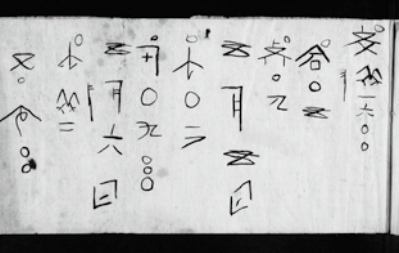
この一行目は例外として、「量り／斤」の字が鶏と数量の右側に書いてある。向きが逆になっているのは他では見られない例である。

図4 複数の家族に関する記録2（第一紙ウラ）



「d」鶏 一 百  
吉元 鶏 二 ……  
小嶺 俵俵俵 「d」魚 二  
大高 鶏 一 ……  
東迎（？）鶏 二 ……  
「d」鶏 一 ……  
四月 廿八日  
「d」鶏 一 百 ……  
佐久本 板 二  
「d」牛蒡 二  
五月 二日  
東小浜 俵 五  
五月 四日  
「d」俵俵俵 「d」鶏 一 百

図5 複数の家族に関する記録3（第二紙オモテ）



松村 鶏 一 六 俵俵  
前花 俵 五  
佐久本 俵 四  
五月 五日  
吉見 俵 三  
「d」俵 九 俵俵俵  
五月 六日  
吉見 鶏 二  
「d」俵（？） 「d」俵俵

民博にあるカイダー字の資料のうち、バイリンガル（漢字とカイダー字）の板札は二〇〇六年にすでに解読してあるが、今まで知られていなかった紙の資料三点が、「読める人を持って眠っていた」と民博の佐々

木利和教授は言う。  
カイダー字資料の新しい発見により、八重山の人びとの知恵や、当時の人々の文字の意識がさらに評価されることを期待している。

マーク・ローザ (Mark Rosa)  
東京大学大学院 人文社会科学系研究科 博士課程  
バジル・チェンバレンが一九世紀末に著した琉球言語資料に刺激を受け、同氏が語る「与那国の不思議な象形文字」について深く研究する。

略された形になっている。「琉球古来の数学」を著した数学者の矢袋喜一氏が与那国島を訪ねた一九一〇年代の資料にはこのような形になっており、竹富島の言い伝えにもこのような形が見られる。

なお、「五合」は□が五回書いて



# 港に臨む「芸術の館」

私のふるさと神戸で誇れるもののひとつが兵庫県立美術館、HAT神戸の一角にたたずんでいる。「芸術の館」はその愛称。多様な芸術活動をたゆまなく展開する



海に面した外観は実に無駄がない。帰りにハーバーウォークも楽しめる

館者一〇〇万人を突破し、そろそろ五〇〇万人を数えるとのことである。大きなお金が動く展覧会

同館ではこの四月から五月末まで、「20世紀のはじまり ピカソとクレーの生きた時代展」を開催していた。

ドイツのデュッセルドルフにあるノルトライン・ヴェストファーレン州立美術館の所蔵品の巡回展で、名古屋を東京を経て神戸にやってきた。この州立美術館の所蔵品は、パウル・クレーのコレクションはじめ、その質の高さはヨーロッパでも認めるところである。

今回、この展覧会を通して、館長補佐の越智裕二郎氏に、美術館の展覧会開催にいたるまでの過程、とくにお金の動きを伺うことができた。

今回の展覧作品の総評価額は四〇〇億円までとして交渉が成立した。

この評価額が保険金算出の元となる。ところが、ユーロが上がり続けたところ、ユーロが一七〇円を突破。結局、ピカソの一点をあきらめて、海を渡るピカソは六点となった。

いよいよ作品が動くことになったが、巡回地がかわることに付き添いの学芸員と修復担当者は、その都度日本にやってきて移動を確認する。

にクレーの色彩感覚が凝縮されている。デジタル・ミュージアムでは味わえない感覚だ。

最後に越智氏に、今後の美術館の目標は？ と伺うと、ちよつと嬉しいこたえが返ってきた。子どもたちに、この世の中にはいろいろな価値観があるのだ、ということを通じて教育できる美術館、なんてこの人はこんな不思議な絵を描いたんだろうねと、そんなコミュニケーションを子どもたちと深めていけるような美術館にしたい、とのことだった。

その費用ももちろん必要経費として計上されることになる。今回の必要経費は二億円。開催館三館で二〇万人を動員しなければならぬという数字につながるらしい。チケットが大人一人一三〇〇円なもの、これですなずける。

## 作品との対話

私の大好きなクレーの「赤と白の丸屋根」も来ていた。はじめて実物を見て、こんなに小さな作品だったのか、と気づかされた。小さな面積

たかはし はるこ  
高橋 晴子

大阪樟蔭女子大学 学芸学部教授

専門は、身体と装いの情報処理。民博のウェブ・サイトから〈服装・身装文化データベース〉を公開している。世界の身装情報の拠点づくりとファンタジー映画に関心がある。



よく利用されている美術情報センターは入り口のすぐそばに。とても明るいセンターだ



充実したミュージアム・ショップには魅力的なグッズがいっぱい



「20世紀のはじまり ピカソとクレーの生きた時代」の展覧会場風景

この円形テラスは、おすすめスポットのひとつ。ギャラリー一棟にもつながっている



# 表紙モノ語り

## オーストラリア・アボリジニのアクリル画 「ミツアリのドリーミング」

民族：ピチャンチャチャラ 国名：オーストラリア  
作者：ジャネット・ハーバート 46x56cm  
1987年収集、H0149428



久保 正敏

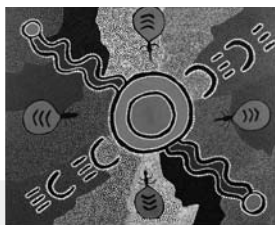
民博 文化資源研究センター

オーストラリア中央砂漠地域のアボリジニの人たちには、儀礼の際に各部族固有のドリーミング（神話体系）を様々な抽象紋様を使って砂絵やボディペインティングとして描く伝統があった。各紋様は文脈により意味が異なる。民博オセアニア展示場に砂絵シンボリズムの一部が図解されている。ドリーミングは、公開レベル、神聖レベル、秘密レベルなど多層の意味を持つので、その表現に多義的な紋様は便利なのだ。

一九七一年、中央砂漠のパプニアに白人美術教師として赴任したジェフリー・バードンは、生徒が砂に描いていた紋様を紙に描くように勧め、それに大人たちも関心を寄せて校舎の壁にドリーミングを描くことになつた。アイデンティティに深く結びつく本地域の抽象紋様が西欧の画材で表現された最初の出来事であり、その際に描かれたのが、地名の由来であるミツアリのドリーミングだった。やがて、アボリジニたち自身が美術運動を立ち上げ、カンバスとアクリル絵の具を使い、砂絵の紋様を描き、描いてはいけな秘密の部分を中心に描いて埋める、というスタイルが確立し、周辺のコミュニティにも広まった。バードンの努力によって美術界に販路も確立、モダンな印象の点描画が好まれたのか八〇年代には国際的に知られるようになり、今や世界的な画家が数多く生まれている。働きアリの一部が腹に蜜を貯める

ミツアリは、砂漠で糖分を得る貴重な食材なので、この地域の部族グループの多くがミツアリのドリーミングを持つ。ミツアリは深い地中に空洞と通路を作るので、地下水脈や泉はミツアリの巣から生じると信じられており、ミツアリのドリーミングの多くが泉と結びつく。

この絵でも、旅するミツアリの目指す聖地の巣から生じた泉が中央に描かれ、人を表すU字型と掘り棒を示す三本の線の組み合わせは女性を表し、巣を掘り返そうと周りに座っているさまを表す。U字型が人を表すのは、砂上に残る尻跡の形から。このように、地表の痕跡に基づく紋様が多いのは、採集狩猟生活では痕跡が大事な情報源だったからである。





企画展

「チベットの  
ボン教の神がみ」

一四世紀以降に確立したボン教の図像学を通じてボン教の神がみを紹介し、チベット仏教とはやや異なる世界をご覧いただけます。

会期 七月二日(火)まで  
会場 常設展示場内



会期 八月三日(木)～八月二日(火)  
会場 常設展示場内

「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕二〇〇年記念」

六個の点の組み合わせで仮名・アルファベット・数字を書き表す点字。この究極の触る文字に込められたたたかな創造力とかなな発想力。本展では多様な展示物を通じて点字の歴史を紹介し、点字力の今日的意義を考えます。

「博学連携教員研修  
ワークショップ  
二〇〇九 in みんなく」

民博を利用した実践事例の紹介やワークショップをとおり、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。  
日時 八月四日(火) 一〇時～二〇時  
分一六時(受付一〇時)  
第一部  
講演とミュージアムツアー

〈第一部〉  
ワークショップ  
① インターネットを用いた民博の事前学習「マルチメディア解説の作成を通して」  
② 北西海岸先住民の木箱づくり  
③ 仮面づくり  
④ モノからひらめくモノコード  
⑤ ひとかけらの「チヨ」レットから  
⑥ 鯨のESD(持続的発展教育)料のふるさとからの便り  
会場 セミナー室および常設展示場など  
参加費 無料  
参加申し込み方法  
所属・参加者名・参加希望ワークショップを明記のうえ、左記までお申し込みください。  
お問い合わせ 情報企画課 情報企画係  
ファックス 〇六六八七八一七五三三  
E-mail hakugaku@idc.minpak.ac.jp

夏休みのづくり  
ワークショップ  
羊毛でつくるペーパーウエイト

羊毛と石を使ってペーパーウエイトをつくります。羊毛には水分、圧力、熱などを加えると、線維同士が絡み合って布状(フェルト化)になる特性があります。フェルト化を体験し、民博の常設展示場でフェルトによる展示品を探してみましよう。

みんなくミュージアム  
パートナースによる  
点字体験ワークショップ

「みんなくミュージアムパートナーズ」による点字体験ワークショップを開催します。しおり、名刺、カード、テープに、名前、好きな言葉などを点字で打ってみませんか。  
日時 七月一日(土)  
二時～五時三〇分  
会場 一階エントランスホール  
参加費 無料

\*詳細及びお申し込みについては、みんなくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■韓敏 著  
『革命の実践と表象 現代中国への人類学的アプローチ』  
風響社 定価：3,150円(税込)  
革命は近代中国史を貫く核心的概念。17人の中国研究者が、服飾・映画・アート・革命表象、社会制度と文化儀礼の再構築、グローバル時代の革命記憶と構造転換、以上の3点から革命を追う初めての論集。



■庄司博史 P.バックハウス F.クルマス 編著  
『日本の言語景観』  
三元社 定価：2,205円(税込)  
近年、鉄道駅の案内や街角の看板で、英語のほか、韓国語や中国語など外国語表示が目につくようになった。本書は、このような外国語を用いた表示による言語景観を社会の動きとのかかわりの中で考察する。



■国立民族学博物館 監修・編集  
『旅 いろいろ地球人』  
淡交社 定価：1,260円(税込)  
「毎日新聞(大阪本社版)」に連載中の、国立民族学博物館(みんなく)研究者が執筆する「異文化を学ぶ」の3年間分(150篇)を単行本化。一定の地域でしかなかった「文化」や「民族」がひろがりを見せ、異文化とされていたものが身近になりつつある今、それを知り、触れることでグローバル化する日本をより理解し、どのように振舞えばよいかを考える書。



みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13:30～15:00(13:00開場)  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第374回 7月18日(土)  
「グローバル化の中の漢族婚礼」  
講師 韓敏(民族社会研究部准教授)

グローバル化によって世界が均一な文化に覆われているようでありながら、実際に人びとはローカルな環境のなかでグローバルな文化を再編成しつつ、自分らしさ、地域性、民族性、ルーツと伝統などを再認識し、再構築していこうとしています。多元的に展開された漢族の婚礼を通して、現代中国の庶民の生活と文化変容を考えてみます。



第375回 8月15日(土)  
「音盤に聴く東アジア近代音楽史—日本コロムビア外地録音資料」  
講師 福岡正太(文化資源研究センター准教授)

戦前、日本コロムビア社は、上海、台湾、朝鮮等に向けてレコードを制作販売していました。現在、民博はその原盤を所蔵しています。東アジア近代音楽史をその音溝に刻んだ外地録音資料の概要をご紹介します。



友の会

友の会講演会 会場●国立民族学博物館 第5セミナー室  
定員●96名(当日先着順、会員証をご提示ください)

第374回 8月1日(土)  
時間●14:00～15:30(13:30開場)  
シリーズ「先住民のいま」②  
ダレがダレを「先住民」とよぶ?  
—東南アジアにて  
講師 信田敏宏(研究戦略センター准教授)  
古くから人の移動が激しかった東南アジアでは、「先住」か「後」からの民族かの区別は容易ではありません。近年、国家や国際団体によって急に「先住民」と呼ばれるようになった人びとと、そう呼ぶ側との意識のズレをお話します。

第375回 9月5日(土)  
時間●14:00～15:30(13:30開場)  
シリーズ「先住民のいま」③  
共生の道をさぐる「先住民」  
—オーストラリアにて  
講師 松山利夫(民族文化研究部教授)  
昨年、ラッド首相が過去の先住民政策について謝罪するなど、従来の施策が見直されつつあります。先住民であるなしに限らず多様な人びとが社会を構成することがさげられない現代。共生社会への道程として、オーストラリアの事例を読みときます。

東京講演会 7月25日(土)  
アンデスの遺跡と人びとの暮らし  
講師 加藤泰建(埼玉大学副学長)  
民族学研修の旅で訪問するペルーに関連し、アンデスの遺跡と、それと隣り合わせに、今を生きる人びとの関わりについてお話いただきます。  
時間●14:00～15:30(13:30開場)  
会場●JICA地球ひろば  
セミナールーム202

定員●40名(当日先着順、会員証をご提示ください)

国立民族学博物館 友の会  
電話 06-6877-8893  
ファックス 06-6878-3716  
電話でのお問い合わせは  
月曜～金曜日午前9時から17時まで  
にお願いします。  
http://www.senri-f.or.jp/  
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

ドイツの木の工房から  
森の国とも呼ばれるドイツでは、木を使った職人の手仕事は今も息づいています。そんなドイツの森に囲まれた



レグラー工房：くるみ割り人形(8,400円)、クルーゲ工房：塩コショウ入れ(3,675円)、ゲルネグロース工房：くるみ細工(各2,100円)、飾り台10座(8,295円)

エルツ山地、ザイフェン村に点在する工房から愛らしい木工細工が届きました。年と共に木目の味わいが増す「くるみ割り人形」。殻の中に現地の風物がおさまった「くるみ細工」。幸運をもたらすといわれている「ブタの調味料入れ」等。工房ごとに、順次ミニコーナーでご紹介してまいります。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ  
電話 06-6876-3112  
ファックス 06-6876-0875  
水曜日定休  
ウェブサイトもご覧ください。  
オンラインショップ「World Wide Bazaar」  
http://www.senri-f.or.jp/shop/  
E-mail shop@senri-f.or.jp

# 信じる者は、救われぬ

ラテンアメリカは、話し言葉の豊かな場所である。大統領は、演説が巧みであることが当然とされ、ポビユリズム（大衆迎合主義）政治を支える要因の一つにもなっているし、地方の小さな村でも、祝宴の席で子どもが、身振りを交えて詩を朗読することもよく目にする。

## ● 笑い話チステはペルー大衆文化の代表格

## No creas nunca en cielo serrano, lágrimas de mujer y cojera de perro

ノ・クレアス・ヌンカ・エン・シエロ・セラノ、  
ラグリマス・デ・ムハール・イ・コヘーラ・デ・ペルロ

私がここ三〇年、発掘調査に通っているペルーも例外ではない。公用語として流通するスペイン語に限っても、ペルー独自の意味や表現を指すペルーニスモや、それに含まれましょうが、辞書的な意味から派生させて文意を多義にしてみようドブレ・センチード（二重の意味）などさまざまな表現法があり、またこれらを駆使して語られる笑い話チステは、ペルー大衆文化の代表格である。タクシーに乗れば、

運転手はハンドルから手を離すほど語りに熱中し、友人の集まりでは、登場人物の声色を使い分けながら、競い合うように何時間でもチステを披露しあう場面に必ずや出会う。顔を赤らめるようなテーマ（赤いチステ）から政治的話題まで、際どさや鋭さが目立つチステは、わが大阪を凌駕するほどの笑いの宝庫である。

## ● 足の不自由な犬は信じちゃいけないよ

そんな人間臭いラテンアメリカの対人関係ならば、さぞかし人の良い人たちがかりかと思いきや、どっこい、だまされることが多い。たいていは、たわいのないことばかりでなのだが。

そんなとき、「だからよく言うだろう」と論ずように始まるのが、今回とりあげたスペイン語の言い回しだ。直訳すれば、「山の空、女の涙、足の不自由な犬は絶対に信じちゃいけないよ」となる。女性を怪しげな存在と見ていることからすれば、男性側に立つ表現かもしれない。

一方で、場所によっては、「運転手の言葉」という表現が信じちゃいけないものに加わることもある。長距離トラックカバスの運転手のこと

だろう。到着までの時間や運転技術の未熟さを心配しての言い回しではないようだ。こうした運転手が女性を誘う代表的職業と見なされていることから考えれば、女性側に立つ警告を発している表現にも受け取れる。

## ● だますことはメステイソの生存戦略の一つ

さてラテンアメリカでは、植民地期以降、ヨーロッパ人支配層と、支配された先住民との間に混血メステイソが生まれ、場所にもよるだろうが、今や人口の大半を占めるようになった。

メステイソは、その社会的に曖昧な位置づけ故に、アイデンティティも持ち得ず、双方の階層間を巧みな身の処し方で媒介し、生き抜いてきた歴史をもつ。だからこそ、だますことも、メステイソの生存戦略の一つであり、言葉の勝負であったのだろう。

それにしても、足を引きずる犬までも、餌をもらうと、舌を出して立ち去る健常犬としてふるまうのなら、ペルーの犬はかなり賢い！

アンデス地帯で家畜化された無毛犬



せきゆうじ  
関雄二  
民博 研究戦略センター

専門はアンデス考古学。アンデス山中に眠る紀元前の古代神殿を発掘し始めて今年で三〇年。権力の発生過程を検証するとともに、文化遺産を核とする住民参加型開発を模索中。



街角で売られるチステ集

# 心地よい生をもつめて 21世紀のライフデザインへ

心地よい生はどのような要素から構成されるのかということに思いを馳せるようになった。そのきっかけは、子どもたちが昼休みに、いったん家に帰って昼食をとる習慣が生きているスイスのザンクトガレン州で、福祉施設で用意された弁当を地域の高齢者へ自転車で配達する子どもたちの暮らしに触れた時である。スイスには自宅に住み続けることを



昼食に帰宅した男の子（スイス、グラッブス、1999年9月）

のアウトリーチやボランティア活動に出会った。

外部や他の世代の人間も参加して、民族文化を表現する活動や食事メニューなど具体的なテーマが議論される。参加する者すべてが意見を述べることができ、そしてこのように開かれた議論の場が保証されていることは、街全体のつくりにも反映されている。

これらの試みは、ウエルフェアと呼ばれるてきた社会制度としての福祉のみならず、ウエルビーイング（心地よい生・幸福）の実現に向けた継続的調整を協働作業として実践してゆくことと深く関わる。

したがって、これらに関する研究では、少子高齢社会における問題への対処を提示することには留まらない。すべての年代の人々の暮らしや人生観を問いつく基礎的研究と現場の実践に関する応用的研究とを並行させて実施することが重要となる。

## ●新たな対話とネットワークへ

そこで私たちは、領域を横断する学際的研究と、研究者・実践者を包摂するグループによる研究を組織した。現在は、民博の共同研究「ウエルビーイング（福祉）とライフデザ

イン」と科学研究費プロジェクト「少子高齢・多文化社会における福祉・教育空間の多機能化に関する歴史人類学研究」を連動させて進めている。

二〇〇九年二月二十八日と三月一日には、共同研究の初年度成果公開として、国際研究フォーラム「ライフデザインと福祉（Well-being）の人類学」を立命館大学で開催した。

ここでは、高齢者、子どもたち、障害者などの利用に適した施設・空間の多機能化とその問題に取り組む現場からの報告があった。施設の機能として想定されていたことからみても、部分を明確化することにより、人間の生を総合的に向上させるための基礎的知見と現場での応用可能な情報を提示した。

一般市民も含めて約一四〇名が参加したこの二日間のフォーラムを通して、次世代を見据え、専門分野や特定地域を横断する新たな対話やネットワークを醸成する次なる試みに繋げてゆけたらと願っている。



国際研究フォーラム（第IVセッション「技術と障害者から始まるコミュニティ・デザイン」）〈2009年3月1日〉

鈴木七美  
民博 先端人類科学研究部

専門は歴史人類学・医療社会史。ユートピア・コミュニティ、オルタナティブ教育・医療など、ライフデザインの思想と実践を追っている。著書に、『癒しの歴史人類学』（世界思想社、二〇〇二年）、『出産の歴史人類学』（新曜社、一九九七年）などがある。



望む高齢者を支援する「シユピテックス」というシステムがあるが、それに加えて、ここでは高齢者と子どもたちがゆったりと時を共有できる工夫がされていた。

●ウエルフェアから  
ウエルビーイングへと……

その後、多文化主義を掲げるカナダで、様々なエスニシティや宗教の人々が利用する高齢者用住居・施設において、多様な要望に応えるため

多文化を  
ささえる  
人びと



# 中国人コミュニティと 日本社会をつなぐ

## 「関西華文時報」

関西地域の中国人コミュニティをささえる「関西華文時報」。東京発信型のメディアとは一線を画し、関西にこだわりつつオリジナリティ溢れる報道を通じて見えてくるものがある

大阪城に近い瀟洒なマンションの一室に、「関西華文時報」の編集部はある。在日中国人や中国に関心を持つ日本人をターゲットとする新聞である。同紙の発行人をつとめるのは黒瀬道子さん。中国の大学講師、翻訳会社の設立を経て、二〇〇二年に中国人のパートナーとともに「関西華文時報」を創刊した。

「東京発信型のメディアとは一線を画し、自分達にとって身近なニュースを取り上げるメディアをつくりたい」という思いからだった。

### 関西在住中国人に向けて

在日中国人の外国人登録者数は、在日コリアンを抜いて、ついに六〇万人を突破した。中国人コミュニティを情報面でサポートするために、数多くの中国語新聞が登場している。しかし、情報の東京一極集中のため

に、関西在住の中国人に向けたメディアは少ない。公称発行部数は月三万部。毎月一日と一五日に刊行される。発行エリアである関西・東海地域の中国人コミュニティの動向、日中関係

のニュース、中国文化に関する情報を中心だ。地元の中国料理店や中国語の通じる商店の記事・広告など、生活情報も豊富である。通信社やインターネットの情報を転載する中国語新聞が多いなかで、所属記者の記



中国映画界の巨匠陳凱歌(チェン・カイコー)監督が来日した際にインタビュー

活性化に繋がるといふ。時に地元の中国人を伝える同紙のニュースが、中国の通信社を経て全世界に配信されることさえある。「読者との距離の近さ」ゆえに、編集部には一般読者から悩みの声や相談が寄せられることも多い。日本で生活するうえで抱える不安や不満。そんな読者の本音にこたえるために、台湾人牧師による「人生相談コーナー」を連載し好評を博している。一つの記事が思わぬ影響力を發揮することもある。日本に留学中の中国モンゴル族の学生が癌を患い苦境に立たされている姿を報道したところ、それが中国大使に伝わり、大阪

「関西華文時報」の表紙



主要な書店でも店頭販売されている

総領事を通じ励ましの言葉と慰問金が届けられた。これを契機に在日中国人から募金が集まったという。

### 紙面が文化交流の舞台

「関西華文時報」のもう一つの特徴は、中国語と日本語の紙面が並存していることだ。「在日中国人と日本人が仕事や生活をともにする状況が増えるなかで、中国人の動向を日本人に伝えたかった」ことが、日本語紙面を設けた理由という。逆に、日中交流に尽力している日本人のコラム

を掲載したり、日本社会の動向を中国人読者に伝える工夫もしている。一口に在日中国人といっても、ずっと日本に住んでいる老華僑、最近来日した新華僑、帰国者、大陸出身者や台湾出身者など、その背景はさまざまであり価値観も異なる。そのなかで同紙は、立場が異なる読者が本音を出しあい、議論を交わせる「フォーラム」としての役割も担っている。つまり、日本人社会と在日中国人、そして中国人社会内の意思疎通という二重のコミュニケーションを促進する性質を兼ね備え、その活動の幅広さは画期的である。

### 情報提供という「サポート」

以上から見えてくるのは、母語による新聞発行という事業が、コミュニティのサポートになり得るといふ事実である。つまり公益性と営利性の両立という意味で、「関西華文時報」はユニークな可能性を体現して

なかの かつひこ  
中野克彦

立命館大学非常勤講師

専門は、国際社会学、エスニック・メディア論。中国系コミュニティを中心に、文化変容とメディアの関係について研究。共著に、『移動する人びと、変容する文化』、『事典 日本多言語社会』などがある。

事や読者の寄稿を中心に、あくまで地元密着型の独自性溢れる紙面づくりを目指してきた。

### コミュニティの活性化のために

「関西華文時報」の取材対象は、国際社会で活躍する大物から一般の在日中国人までさまざまである。日中英の三言語で作詞・作曲を行なう神戸華僑五世のシンガー・ソングライター、地元のスキー大会で優勝した神戸華僑四世……。興味深いのは、地元の中国人を伝える記事が、日中間をゆるがす重大事件を抑えて第一面を飾ることも珍しくないことだ。

一般の人びとにしてみれば、自分の活動が新聞に取り上げられることは誇りであるし、励みにもなる。周りの人びとにとっても、知人にスポットライトが当たることで話題の輪が広がる。それがコミュニティの

いるといえる。

とはいえ一般的に中国語新聞のこれから考えた場合、民間企業であるがゆえに超えなければならぬハードルもある。

同紙が創刊された当時、中国語新聞の起業はひとつのブームであったが、現在は不況ということもあり、生き残っている企業は決して多くはいえない。そうしたなか、読者の情報ニーズをいかに発掘し、満たすかが課題となる。そのために「他紙にはない情報のオリジナリティにこだわっていきたい」と黒瀬さんは語る。今後も新聞のクオリティを維持し、店頭販売とともに、自主記事の多さをアピールしていくという。

地域に根差したコミュニティションを重視する「関西華文時報」の取り組みに、わたしは、中国人コミュニティの活力とともに、これからの多文化社会をささえるビジネスの可能性を感じている。



「関西華文時報」発行人の黒瀬道子さん

# 空気を食べる きれいな食べ物 〈セミ〉

ボルネオ島に居住する先住民の中には、夜、灯火に集まるセミを捕まえ唐揚げにして食べる人びとがいる。セミを食べるといっちょっと風変わりな食文化も、しばらく現地でも暮らしているといつの間にか慣れてしまうものである



セミの翅と足を取っているところ

## 翅と足を取り 胴体だけを油で揚げる

サラワク州に住むカヤンと呼ばれる人びとは、このセミを食べることがある。カヤンの中にはロングハウスと呼ばれる伝統

夏の風物詩には色々あるが、セミの声は代表的なものといえるだろう。日本の夏のように暑い日々が一年中続くマレーシアにもセミがたくさんいる。マレーシアの国土はマレー半島にある西マレーシアとボルネオ島北部に位置する東マレーシアから構成される。東マレーシアのサラワク州には広大な熱帯雨林があり、セミも多数生息している。

## 飛んで火に入る夏の虫

ボルネオ島のセミは夜、灯火に集まる性質をもっている。日本のセミ

らなかつた。なぜそんなことをしているのかと聞いてみると、「料理して食べるのだ」と説明してくれた。集めたセミは翅や足を取って胴体だけにする。そして油で揚げて食べるのである。このセミの唐揚げはおかずというよりは、手軽なおやつのような感覚で食べられる。味は別に

## 食感バリバリ

セミそのものにはそれほど味はな

不味くはないが、かといつてそれほど美味しくない。



焼き畑に陸稲を植えているカヤンの人びと



## セミ

主に熱帯や亜熱帯の森林地帯に分布する。ヨーロッパのような亜寒帯の森林にも分布するが、それほど一般的ではない。南欧以外のヨーロッパ人はセミを知らないことが多い。イソップ童話の「アリとキリギリス」は、もともとは「アリとセミ」であったが、ヨーロッパ北部ではセミが少ないため、キリギリスに変えられたという説がある。セミのオスの成虫の腹腔内部には音を出すための器官があり、鳴くことによってメスを引き付ける。中国や東南アジア各地でセミを食べる習慣があるが、沖縄でもセミを食べることがある。

もよく街路灯の近くに集まり夜通し鳴いているが、ボルネオのセミは鳴くだけでなく、家の光めがけて飛び込んでくるのである。時には蛍光灯の周りを何匹ものセミがぶんぶん飛び回り、壁や天井に一〇匹近くが張り付いていることもある。種類も多く、日本のクマゼミやアブラゼミに似たセミや、日本では見ないような緑色のきれいなセミもいる。鳴き声を聞いている分には楽しいセミだが、蛍光灯を割るのではないかと思えるぐらいの勢いで飛びまわるのを見ると、ちょっと冷や冷やさせられる。

く、居酒屋でよく売っている川エビの唐揚げのようなバリバリとした食感である。あまり上質ではない油を使って揚げると、ギトギトしてしまい、正直それほど美味しいとは感じない。だが私の友人たちは、「セミは空を飛び回って空気を食べているだけだからきれいな食べ物なんだよ」と言っていてこのセミの唐揚げを喜んで食べている。大して美味しくないなあと思っ



翅と足を取られたセミ



カヤンのロングハウス

いちかわてつ  
市川哲  
民博 外来研究員  
立教大学観光学部プログラムコーディネーター  
専攻は文化人類学、トランスナショナルリズム研究、東南アジアやオセアニアにおける中国系住民と先住民との相互関係を、人口移動や資源開発といった観点から研究している。

# 歳時 世相篇 16

五節句のひとつに数えられる七夕で、笹竹に短冊を飾り付けて願掛けをする風習は、日本の夏を彩る風物詩として今なお受け継がれている。七夕は新暦では梅雨の季節の七月七日であるが、旧暦では今年は八月二十六日となり、日本各地ではおおむね七月から八月のあいだに催される行事として定着している。

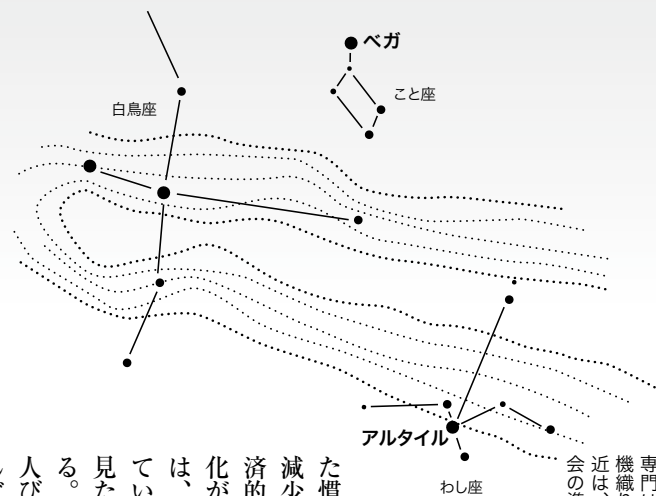
## 機織りをサボタージユして 制裁をうけた二人

七夕といえば、織姫（織女星、こ座のベガ）と彦星（牽牛星、わし座のアルタイル）の伝説があまりにも有名である。以下は、その大筋である。

天帝の娘で天の川の東岸に住んでいた機織り上手の織姫が、対岸に住む勤勉な牛飼いの男のもとに嫁ぐことを許された。しかし、結婚したのちは機織りをしなくなったことから天帝の怒りにふれて対岸から戻され

## 七夕 織姫の嘆き

陰陽道で陽数とされる奇数が重なる1月1日のお正月、3月3日の桃の節句、5月5日の端午の節句、そして7月7日は七夕、9月9日は重陽の節句。旧暦の七夕の頃は、日暮れになると上弦の月が一等星とともに輝きはじめる。織姫と彦星は、舟にみたてた月に乗って天の川を渡り、逢瀬を楽しむという



よしもとしのぶ  
吉本 忍  
民博 民族文化研究所

専門は、民族技術、民族美術・工芸。世界の機織り技術の通文化的研究などをおこなう。最近では、企画中の世界の機織りと織物に関する展覧会の準備のため東奔西走している。

ることになった。それでも、機織り続けるならば一年に一度の七夕の日に会うことを許されたという。この伝説については、中国の東漢（後漢）の時代の『風俗通』に記された牛郎織女伝説が最古の文献とされている。

## 人類の中核技術として 位置づけられる機織り

七夕の願掛けの風習は、本来は機

織り技術の上達を祈ることからはじまったとされている。機にかけたタテ糸のあいだにヨコ糸を直交させながら織物を織るといふ機織り技術は、世界の広範な地域に普遍的に見いだされる主要な生活技術のひとつである。古くには機織り技術を習得することなしには、一人前の女性として認められないという慣わしが一般的であったようである。

もとより現代においては、そうし

バル化の根底にあるIT革命もまた、機織り技術に依拠していることについては、ほとんど知られていない。ちなみに、IT革命はコンピュータの出現によって引き起こされた。そのコンピュータは中国の明代に完成した複雑な紋織り織機がシルクロードを経て西洋に伝わり、19世紀初頭のフランスで、その織機から派生的に発明されたジャカード織機の紋織りシステムをつかさどるパンチカードをもとに誕生した。

## 織姫・彦星と同じ運命を 辿るかもしれない現代人

さて、こうした機織り技術の歴史的な展開を天界にまたたく織姫は、どのような思いで見つめつつけてきたのであろうか。

織姫が天の川の岸辺でどのような織機を使って機織りを続けているのかについてはさだかでないが、伝説の起源を掘りどころにするならば、中国の考古遺物のうちに見いだされる漢代画像石にあらわされた足踏み式の織機あたりがもっとも妥当なものであると想像される。そうした織機は今日、世界中で普遍的に使用されている足踏み式織機（わが国では一般に高機と呼ばれる）のプロトタイプともいえるべきものである。織姫と彦星伝説を持ち出すまでもなく、古代社会では、自給的、ある



中国、江蘇省銅山洪樓遺跡出土の漢代画像石にあらわされた機織り図（拓本）  
〈出典・夏竦著「我国古代蚕、桑、絲、綢の歴史」『考古』第二期 1972〉

いは半自給的なシステムのなかで、織物をはじめとする生活必需品を、需要に応じて生産してきた。それは進化した道具や機械に依存した、流通経済の拡大にともなう大量生産とは違い、いわゆる手仕事による少量生産システムであった。基本的には、あたらしい日本語として農業関係者のあいだで提唱されている農産物をその生産地域で消費するという「地産地消」とも相通じるところがある。

地域社会の中での需要と供給バランスをバックアップしてきた手仕事による少量生産システムでは、人間のあらゆる身体能力を駆使して、質量ともに満足のできるモノづくりをめざしてきたはずである。

しかし、そうした時代とは異なり、今や地球上にはそのキャパシティをはるかに超えた人間が住み、進化した道具や機械に依存した画一的なモノづくりが進行するなかで、急激なグローバル化が流通経済を全世界規模に拡大している。その結果として、産地偽装や毒入り食品などが相次ぐなど、さまざまな社会問題を引き起こしている。

機織りをしなくなったがゆえに、彦星との仲を引き裂かれた織姫は、手仕事による自給的、半自給的なモノづくりをほとんど放棄した地球のようすに、自らの過去をふり返って嘆いているのではあるまいか。

# 魚を売ることで生きる

## 沖縄県糸満のアンマーたちに学ぶ

私の最初のフィールドは沖縄の漁師町、糸満だった。大学院の修士課程に在籍していた一九九六年、調査のイロハも知らずに飛び込んだのだ。当時の私は、市場に生きる沖縄の生活文化を、魚を手がかりに探ろうとしていた

三田 牧  
民博 機関研究員

大学院では沖縄県糸満で「海を読む」知識と魚を読む知識をもとに海と人との関わりを考えた。現在は、かつて日本に植民地支配されたパオオの人の歴史語りを研究している。

### 女が経済的に自立して あたりまえの社会

耕作に適した土地の狭い糸満では、琉球王朝の時代から漁撈が盛んだった。糸満では魚をとるのは男性、魚を売るのは女性の役目だった。アンマーとは「お母さん」という意味の方言だが、「糸満アンマー」といえば魚売りの女性の代名詞でもある。

糸満アンマーは、魚を売った代金の一部を魚代として漁師に支払い、残りを自分の貯えとすることで知られてきた。男性が危険な海の仕事を

する糸満では、女性が経済力を持たねばならなかったのだ。結婚前の娘でさえも自分の財をもつことを公然と認める社会は、戦前の日本では珍しかっただろう。

調査を進めるうち、私は何人もの魚売りのアンマーと知り合いになった。若い人で一九九六年当時四十歳



セリでカジキをみためるアンマーたち

女たちにとって、魚を売って稼ぐことにはどういう意味があるのだろうか。一人でも立派に生きる

八十歳代のウミトウおばあは、まだ若い頃に夫と死に別れて子どももなかった。また、もともと糸満に奉公人として来た人なので、親戚も近所にはいなかった。

しかしこのおばあに孤独の影はなかった。手ぬぐいを首にかけて、市場に構えた店に立ち、買い手や市場の人と話す。売る魚はもっぱら冷凍



イカを頭にのせるウミトウおばあ

そうはいつても生活に不安がなかったわけではないだろう。一昔前、おばあは銀行から借金をして土地と家を買った。家の半分は人に貸し、残りの半分に自分が住んだ。おばあは体が丈夫だったが、もしもの時は家を借りている人たちに助けを求めることができる。

\*現在糸満市といえば沖縄本島南部一帯を指すが、漁業で有名なのは行政区分では糸満市糸満である。

おばあのお店に足を運ぶことがあった。人一倍苦勞を重ねてきたおばあは、芯からやさしい笑顔をもっていたからだ。

お土産を持ってゆくと、「お金は大事にしなさい」と叱られた。はじめての調査を終えるとき、おばあが饑別としてくれた五千円を私はまだ大事に持っている。私にとってはお守りのようなものだ。

### 子どもを背中にしぼりつけてでも仕事はできる

やはり八十歳代のトウクヤーのおばあは、行商をする数少ないアンマーの一人だった。魚の入ったたらいを他の人の力を借りて頭に載せると、細い体で上手にバランスをとり

ながら狭い路地を縫ってゆく。

訪問先の家々でおしゃべりをしながら魚をさばき、売り渡す。おばあは、こんな商いをもう何十年と続けてきた。

おばあは夫が病気になったため、自分の働きで子どもたちを育てなければならなかった。魚を売ってその日食べるものを手に入れ、食べたならまた次に売る魚を探す。そのようなぎりぎりの生活だったという。

おばあは、久しぶりに私に会うときまわって「あんた、子どもはまだか？」と聞いた。「まだだよ」と言うと、「仕事は赤ん坊を背中にしぼりつけてでもできる。子どもを作りなさい！」と檄を飛ばされた。「親の苦勞を知っているから、おば

あの子どもにヤナー(悪いの)はいないさ」と、おばあはほこらしげに話していた。

八十歳を過ぎてからはさすがに子どもたちも心配し、「魚売りの道具を捨ててしまおうよ」と脅すという。しかし、おばあはおかまいなしだ。一人暮らしで誰にも見張られていないのをいいことに、まな板と包丁、そして魚を入れるたらいをもつて、いそいそとセリに出かけていた。

老年に達し、必ずしも魚を売らなくてもよい境遇におかれても、彼女たちは魚を売りに続ける。それは魚を売ることを通して人とつながることができ、からだろう、と私は思う。



糸満アンマーたちと筆者。中央が筆者(撮影・上原政幸)

糸満で知り合ったアンマーたちにとって、「働くこと」は「生きること」とほぼ同義だった。人それぞれ的人生を送ってきたが、魚売りは彼女たちが生活を切り開く術であった。

うとなかろうと、一人暮らしであるうとなかろうと、彼女たちは孤独ではない。「人とつながりをもちながら生きる」という根源的な欲求が満たされているかぎり、人は幸福であることができるのだらう。

ほんの時々、この先どうやって自分の生活を作っていくか、不安がよぎることがある。しかし私の心にはアンマーたちの教えが刻み込まれていて、それは私にこう言うのである。「働けはいいさあ」と。

あつげらかんと前向きに、そして力強く、糸満アンマーたちはそれぞれの生活を切り開いてきた。彼女たちに研究者として育てられた私だ。糸満アンマーのように前向きに、研究者として生きてゆこうではないか。



おじいのとった魚を道端で売るおばあ



おばあたちは今日も魚を売る



魚の仕入れ時、おしゃべりに興じるアンマーたち

## 編集後記

7月、日本では海開き・山開きなどアウトドアの季節到来である。がその前に、「夏越の祓い」を済まされた方もあるだろう。新暦や旧暦の6月末に設定されているこの行事は、これまでの半年の間に犯した罪や穢れを払い、暑さの夏を迎えるにあたって疫病予防の意味もある。特に今年は、新型インフルの今後にもらんで、身体を鍛える夏としたいものだ。

今号では、作家上橋菜穂子氏にインタビューさせていただいた。世界は様々な要素からなりたっていて相対的な視点なしには理解しえない、という骨太の世界観から物語が紡ぎ出されるというお話を伺うことができた。その世界観のベースの一つが文化人類学・民族学であるという氏の言葉は、その研究センター・資料情報センターである民博にとって心強い。

冒頭の「鍛える」に引き寄せれば、こうした、研究の世界から異なる領域や市民社会への展開は、文化人類学・民族学それ自体を鍛えることにつながる。今後も折に触れて、この研究分野から様々な領域に広がる活躍をされている方々へのインタビューを試みたい。(久保正敏)

### 次号の予告

### 特集 旅する神々

## 月刊みんぱく 2009年7月号

第33巻第7号通巻第382号 2009年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫  
編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史  
中牧弘允 三尾稔 山中由里子  
協力 財団法人 千里文化財団  
制作 京都通信社  
印刷 市蔵図書

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分(予定)。
- 常設展示場観覧料が必要です。
- \*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が、来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別! どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

7月の開催

7月5日(日)

話者: 飯田卓

(文化資源研究センター准教授)

話題: 工芸品と美術品と民芸品

—マダガスカル<sup>1</sup>の墓標彫刻アルアル

場所: アフリカ展示

7月12日(日)

話者: 川口幸也

(文化資源研究センター准教授)

話題: アフリカの都市生活を  
どう伝えるか

場所: アフリカ展示

7月19日(日)

話者: 竹沢尚一郎

(民族文化研究部教授)

話題: アフリカの歴史を  
考える

場所: アフリカ展示

7月26日(日)

話者: 五月女賢司

(文化資源研究センター機関研究員)

話題: アフリカ展示場をつかったワークショップのこころみ

場所: アフリカ展示



アフリカ展示



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

